叢書・ウニベルシタス 336

自伝のかたち

一文学ジャンル史における出来事

ウイリアム・C.スペンジマン著
船倉正憲 訳

自伝のかたち

―文学ジャンル史における出来事

ウイリアム・C. スペンジマン
船倉正憲訳

法政大学出版局

〈叢書・ウニベルシタス　336〉
自伝のかたち
1991年8月30日　初版第1刷発行

ウイリアム・C.スペンジマン
船倉正憲訳
発行所　財団法人　法政大学出版局
〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
電話03(3237)1731 振替東京6-95814
製版，印刷・平 文 社／鈴木製本所
© 1991 Hosei University Press
Printed in Japan

ISBN4-588-00336-4

凡　例

一、著者による註は、本文の当該箇所末尾の右脇に（原註一）、（原註二）等と記し、巻末に一括した。

一、訳者による註は、本文の当該箇所末尾の右脇に（1）、（2）等と記し、原註に続けて巻末に一括した。

一、各作品からの引用は、著者によるものは本文の当該箇所の直後の（　）内に、訳者による日本語訳からのものは本文の［　］内に頁数のみを記した。

一、原文で語頭が大文字で書かれた単語は〈　〉でくくり、イタリックスで記されたものには傍点を付した。

謝辞

本書が完成に向かってゆっくり進行していた過程のいずれかの段階で、数多くのひとたちが本書のかなりの分量を読む作業を引き受けてくれた。そのなかでも、激励と助言を与えてくれたL・ロッド・ルンドクィスト、アルバート・B・フリードマン、クインシー・ハウ、アン・フィッシャー、マーガレット・ボーグマン、トマス・マクファーランド、ノーマン・カウンシル、そしてジェイムズ・M・コックスには特に謝意を表したい。ボーグマン女史、マリリン・スレイアンはビブリオグラフィ兼エッセイの重要な点で尽力してくれたし、特にゲーリィ・ウエストファールはこの分野の学問に深い知識と関心があり、おかげで私は時間の浪費を免れ、また、起こりえた数々の困難からも救われた。キャサリン・トランツがいつも通り慎重にこの一冊をタイプしてくれ、これをサリー・セラフィムが鋭い洞察力を働かせて編集してくれた。編集過程全体を通してエレン・グレアムが見せた気転、親切、そして良識に関して言うと、すべての著者にこんな有能な友人がいたらよい、としか私には気持ちを表わすことができない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ナンへ

目次

謝辞
序文

第一章　かたちの範型　・9・
聖アウグスチヌスの『告白』　・9・

第二章　歴史的な自伝　・49・
『新生』　・49・
『溢るる恩寵』　・60・
『ベンジャミン・フランクリンの自伝』　・69・

第三章　哲学的な自伝　・81・
ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』　・81・
『序曲』　・93・
『あるイギリス人阿片吸飲者の告白』　・118・

第四章　詩的な自伝　・141・
『衣裳哲学』　・141・
『デイヴィッド・コパフィールド』　・152・
『緋文字』　・167・
後書き　・209・
自伝の研究――ビブリオグラフィ兼エッセイ　・213・
原註　・321・
訳註　・325・
解説　・351・
索引　・巻末・

序　文

私がこのささやかな本を執筆する仕事にとりかかって以来この数年のあいだに、自伝（オートバイオグラフィ）は文学研究の周辺部から、虚構、詩、演劇が伝統的に占めてきた特権的な中心部にかなり近い位置へ移行してきた。かりに五年前にこの序文を書いていたとしても、当時の自伝批評家のあいだでは習慣になっていたように、私も自伝というこの立派な文学が学問的に無視されている実状を嘆くことで書き始めていただろう。だが、自伝が批評分野において人気のあるジャンルになったとは言わないまでも、尊重されるジャンルにはなった今では、この主題に関してすでに大量の論文が書かれてきたことを多少認めながらも、この着々と積み重ねられてゆく論文の山にさらにもう一摑みの文書を加えることは正しいのだ、と私は主張すると同時に、以前よりは穏やかな調子で序文を書き始めざるをえない。

近年、自伝に関する著書と論文はちょっとした混乱状態を呈してはいるものの、以前から聞かれた、この分野の研究をさらに求める訴えには十分応えてきた。だが、その半面、このように大量の反応が起こったことで新たな問題が提起されている。つまり、自伝に関して言うと、多く書かれればそれだけ、どんな作品をこのジャンルに含めるのが適切であるかについて意見の一致を見なくなるように思える。この問題についてほんの少数のひとしか考えていなかった時代を回顧してみると、彼らの論点

はこのジャンルに手紙、日誌、備忘録、韻文で書かれた物語を含むことができるかどうかにあった。しかし、全体としては、自伝は少なくとも表面上は著者自身の人生についての実話を与えるものでなければいけない――要するに、自分で書いた伝記でなければいけない――という点では意見は一致していた。ところが、自伝について書く人が数を増すにつれて、このジャンルの境界もそれ相当に広がりを見せて、ついに、どんな自伝研究にも含まれない、また、自伝的に解釈できないような著作のかたちなど実質的にはなきに等しい状況になっている。かつて、自伝といえばジョン・スチュアート・ミルの『自伝』(John Stuart Mill, *Autobiography*)やジョナサン・エドワーズの『個人的な物語』(Jonathan Edwards, *Personal Narrative*)のような、自己を鑑定しているテクストがほぼ独占する、かなり区分が明確にされた領域であった。しかし、自伝はその境界を際限なく広げてきたから、T・S・エリオットやウイリアム・カーロス・ウイリアムズの詩、スタンダールやプルーストの小説、テネシー・ウイリアムズの劇、そしてヘンリー・ジェイムズの序文までもがひとつの場を与えられるようになってしまった。

このように批評家が自伝の境界を拡張する努力をしてきた結果、自伝に許される表現方法に関する考えでは意見が二派に分裂した。一方には、自伝とは伝記的(バイオグラフィカル)な――つまり、虚構的ではなくて歴史的な――資料を用いたものでなければいけない、と主張し続ける批評家がいる。他方には、自伝の作者には適切であり、必要であると思えば、どんなかたち(フォーム)を使ってでも己を表現する権利がある、と弁護する批評家がいる。自伝を特定の研究主題として取りあげようと、他の主題(たとえば個人主義の観念)に関する情報源として利用しようと、あるいは文学作品を自伝として処理しようと、上述の二

つの理論的な立場のいずれかを暗黙にであれ明白にであれ選択することになるだろう。次に、この選択された立場は著者が述べなければならない、その他一切を条件づけるだろう。

これら、自伝にアプローチする方法のいずれにも推奨すべき点が多く含まれている、と私には思える。自伝の概念を自我伝記（セルフ・バイオグラフィ）から完全に区別することができないことは明らかである。このジャンルをどう定義してみても、世界的に自伝として認知されている古典的な作品はすべて、この自我伝記の様式で書かれたのである。また、自伝を定義しなおしたいのであれば、これら承認されているモデルの本質をなす特性を定義しなおすことから始めざるをえない。ところが、自伝の概念を自我伝記と同一視することもできないのである。最近、このジャンルに挿入されてきたさまざまな詩、小説、劇――すべて現代の作品であるか、さもなければ特にモダニスト的な解釈を受けやすい作品であることは意味深い――は、虚構的な性質を包みこんでいるにもかかわらず、アウグスチヌスが自我とは耕作し難い田畑である[1]、と悟って以来たえず自伝の作者を悩ませてきた自我定義という問題そのものに取りくんでいると思える。実際、己を描写する言説から、己を演じ、反省することばの構造へ移行したモダニストの運動と、この運動を説明するために考案された批評理論とがあいまって、文学のモダニズムという概念は自伝の概念と同義に思えるようになったのである。

以上、自伝に関する二つの見解は、私たちが現実のテクストから得る経験に従っているかぎりでは、いずれも正しいのである。そこで、私たちに今必要なものは、自伝は一方で自我伝記の様式との関係を持続していながら、他方では近代になってから虚構のかたちをとる傾向を明らかに強めてきた、この二面を認める自伝の理論か、あるいは、むしろ自伝の説明である。一般に自伝は伝記のかたちで書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

かれてきたからといって、私は自伝を自ら書いた伝記と同一視するのでもなく、自伝は他のかたちでも書かれることがよくあったからといって、この伝統がもっているジャンルとしての重要性を否定するのでもない。そうではなくて、それぞれの時代のさまざまな自伝作者に自分の方法で自分について書かせていた状況を理解する必要がある。言いかえると、自伝はその作者たちが繰りかえし実践してきたひとつ種類のものではない。自伝とは自我の本性についての考えが変化するにつれて作者が実践してきた多種のものであり、自我を把握できる多くの方法とこの把握した自我を報告するのに適切な構成法が描く型（パターン）である。この歴史的な見かたが必要である。

以下の章で自伝のかたちの進化を概説するが、このジャンルに対して下せるかたちの規定でもっとも厳密な規定に適合する作品、すなわち聖アウグスチヌスの『告白』から話を始め、自我伝記の様式の跡をとどめぬ作品『緋文字』で結ぶことにする。私の狙いは、中世初期に興り、十九世紀に自らの内的論理で結末に到達した自伝というただひとつの進化の伝統のうちに『告白』『緋文字』その他の作品を位置づけることで、それらの作品のあいだにジャンルの類縁関係が認められることを証明する点にある。第一章ではアウグスチヌスの『告白』のかたちをやや詳しく分析する。それは、この作品が正真正銘の自伝であり、しかも、この種の自伝の最初の作品である、と一般に承認されているからである。だが、主な理由は、この萌芽的な資料には、これに続く千五百年のあいだに自伝がその発展の過程でとることになる三つのかたち――歴史的（ヒストリカル）、哲学的（フィロソフィカル）、詩的（ポエティック）なかたち――のすべてを用いているということにある。そして『告白』論に三つの章、すなわち自伝はルネッサンス期と啓蒙期に歴史的なものへ発展したと論ずる章、十八世紀後半に哲学的なものへ移行したと論ずる章、そして十九

世紀に詩的な自伝が出現したと論ずる章とが続く。これら三つの章で私は、アウグスチヌスの『告白』に準備されていたかたちの範型（パラダイム）を、外面上代表的であるが、ともかく名の通っている九篇の作品に当てはめて、それらが一体になると自伝を成立させるかたちの交換図を浮かびあがらせようと試みている。

この段階で、私が論考する材料に選んだテクストに関して少々説明を加える必要がある。本書は自伝という主題を歴史的に扱ってはいるが、膨大な数に及ぶ自伝的な著書の全体を概観しているなどと言うつもりはない。それとは反対に、分析の目的が広範囲にわたるので、自伝が伝記的な様式から虚構的な様式へ移行してきたことを説明するのに必要な数だけ作品を選んだ。ここに選ばれた作品が当然、私の説明する移行を最初に実践した、と主張してはいない。多くの読者は私が考察する作品以前に書かれた自伝から、三つのかたちのカテゴリーに当てはまる作品名をあげられるだろうし、さらに多くの読者はここに自分の気に入りの作品が含まれていないことに寛大になれないだろう。また、私は自伝のかたちの進化は、それがどんなものであれ、特定の鎖になる数篇のテクストを直線的に貫いて起こったとも主張していない。だから、私の主題である、もっと大きな運動における決定的に重要だと思えるできごと（エピソード）をもっとも明瞭に例証する作品を自由に選び出せると考えた。

読者のなかには、私が提案している進化は実際は進化ではない、と思う方もいるだろう。というのは、一方では発達の「前段階の」かたち、すなわち歴史的な自伝と哲学的な自伝は今なお書かれており、他方では、「現段階の」詩的な自伝はこの運動のまさに発端、すなわちアウグスチヌスの『告白』に現にあったのだから。この反論の前半に対してはこう答えよう——進化の理論は変化したかたちが

その発生源である先祖に取って代わることを求めてはいない。そのかたちは現にある利用可能なかたちの在庫量を増やすにすぎない。今日実践されていることがすべてつねに実践されていたわけではないとしても、今まで実践されてきたことはすべて今もどこかで実践されている、と言ってもおそらくさしつかえないだろう。

ともかく、上で述べた自伝のそれぞれのかたちは、それに割り当てられた時期に一番よく用いられていたわけではないとしても、その時期を特徴づけてはいた、と私は考えているのである。私が歴史的な自伝と呼ぶかたちは中世から啓蒙期まで広く行きわたっていた自我に関する思想風土と完全に一致していると思える。哲学的な自伝は、時代が十九世紀へと変わるころ、その自我の思想風土内に起こった変化を映しており、そして詩的な自伝は十九世紀のイデオロギーに激変が生じ、それが原因で根本的に改変した状況を表わしていると思える。この型（パターン）のなかでひとりアウグスチヌスのみが自伝伝統のまさに発端で書かれた一篇の作品で、自伝が辿ってゆくことになる変化の全過程を通過していた真正の変則として残っているのである。アウグスチヌスがこの規則に従わない事実に関しては、回顧して見ると、彼を傑出させるのは彼以後に続いた自伝の進化なのである、と簡単に述べるだけにとどめよう。ダンテ、ルソー、カーライルのような後続の自伝作者がそれぞれ現実に用いたかたちを実際には用いなかったと仮定したなら、このように『告白』を未来を予兆的に表わす作品に見せる原因となったかたちの運動は確かに認められなくなるだろう。

さて、以上で説明はひとまず終え、以下の章で分析されるテクストの選択に関して、最後に一言を加えておきたい。二十世紀に自伝のかたちが増殖した点はすでに相当数の人たちが主張してきたが、

私は本書の分析を詩的な自伝の主要例であると考える『緋文字』で終える。では、W・B・イェイツやM・プルースト、T・S・エリオットやウイリアム・カーロス・ウイリアムズ、ロバート・ローエル、そしてシルヴィア・プラスの自伝の試みはどのような場で説明されるのか、と読者がお尋ねになるのはもっともだろう。この疑問点に関して読者が満足されるかどうかは以後の章の説得力にかかっているが、現時点では次のことだけ述べておきたい――自伝をさまざまに、どのように定義しようとも、批評家が自伝を自伝と認めることができたのは、作者の自我が作品の第一主題になっているか、それとも言語行為の重要な対象になっているかを示す証拠に基づいてであった。前者の場合、自我とは作者が代言し述べているどんな内容とも別に存在していると見なされている。その際の言語行為は、自我の歴史的な記述、哲学的な分析、それとも詩的な表現のいずれかを実践する努力になっている。後者の場合だと、自我の存在は言語行為に依存しているものと見なされるのだから、この言語行為はそれ自体の詩的な創造を描き出すことになる。歴史的な自我説明、哲学的な自我精査、詩的な自我表現、そして詩的な自我創出――私の知るかぎりでは、自伝に利用できる手順は以上の四通りだけであり、これらの手順はホーソンが『緋文字』を完成した時点で使い尽くされてしまったのである。この定式的な説明に大きな誤りがないとすれば（誤りがありうることは十分意識している）、それならば『緋文字』以降のすべての自伝は以上のかたちの戦略のいずれかひとつ、ないしは二つ以上の点から説明できるだろう。歴史的な、哲学的な、そして詩的な自伝は今日でも変わらず書かれてはいるが、これら三種類のかたちを生み出し、それら相互を関係づけている自伝ジャンルの進化――本書で概略される運動――は一世紀も前に完了していたのである。

第一章　かたちの範型

聖アウグスチヌスの『告白』

アウグスチヌスの『告白』(Aurelius Augustinus [354-430], *Confessiones* [397-400？]) は三部構成になっている。第一巻から第九巻までアウグスチヌスはすでに信仰の贈りものを授かっており、不変の真理の定点に立って、誕生の時点から回心（コンヴァーション）に到達するまでに送った罪深い生活を回顧している。あるいは、むしろ見下ろしている、と言ってよい。アウグスチヌスは回心の重要性を劇的に表現するために、己の人生内部の変動し続ける視点からその人生を見ることしかできない悔い改めていない古い自我と、その人生はそのあらゆる部分が時間を超越した空間に同時に存在する、永遠に完璧である精神の意匠（デザイン）であると考える回心した新しい自我とのあいだにはっきり一線を画している。回心がもつ宗教的な意義、すなわち過去の生活に割り当てた確かな意味、実際、この物語（ナラティヴ）の教訓全体は、語り手が私はこの時間を超越する知恵を獲得した、だから今私の虚偽の時間的生活の真実で永遠なる範型を見ることができる、と自分と読者とを説得する力にかかっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c